

行書の基本を学ぼう

【第八回】 行書のさまざまな書き方

千葉大学教授 樋口咲子



霜しも月つき
(十一月)

1. 行書の書き方には幅がある

これまで、行書の特徴（丸み・点画の方向や形の変化・連続・省略・筆順の変化）や、部分形の書き方を学習してきました。みなさんの中には、同じ文字でもいろいろな書き方ができることに気づいた人もたくさんいると思います。「紅白」をさまざまな行書で書いてみましょう。

紅白 紅白
紅白 紅白

下の表で、いとへん・れっか・あめかんむりのさまざまな書き方を練習しよう。



雲	点	練		
雷	列	緑		
雲	然	練		
雲	熱	繕		
霜	点	織		
雷	列	緑		

★小筆や鉛筆でなぞってから空欄に書きます。

2. 故事成語・四字熟語をペンで書いてみよう

一陽来復

一陽来復

塞翁馬

花鳥風月

花鳥風月

塞翁馬

山紫水明

山紫水明

質実剛健

質実剛健

守破離

森羅万象

森羅万象

守破離

切磋琢磨

切磋琢磨

雪中松柏

雪中松柏

登竜門

温故知新

温故知新

登竜門

★ボールペンやサインペンでなぞってから空欄に書きます。



3. 漢詩を小筆で書こう

「絶句」杜甫

江は碧にして鳥は愈よ白く／山は青くして花は燃えん
と欲す／今春看す又過ぐ／何れの日か是れ帰年ならん

意味 川は深みどり色に澄み渡り、それを背景に鳥はいっそう白く見える。山は青々と茂り、花は燃えるように赤く咲いている。今年の春もあつという間に過ぎていく。いつになったら故郷に帰れるのだろうか。

杜甫（712-770）李白とともに中国唐代を代表する詩人。仕官後に左遷され、官位を捨てて家族とともに放浪した。社会の現実を直視した詩が多い。

「春晓」孟浩然

春眠 晓を覚えず／处处啼鳥を聞く／夜来風雨の声／
花落つること知る多少

意味 春の眠りは気持ちよく、夜が明けたのも気づかなかった。外はあちらこちらから鳥の鳴き声が聞こえる。そういえば、昨夜は風雨の音がしていたなあ。花はいつのどのくらい散ってしまったのだろうか。



孟浩然（689-740）中国唐代の詩人。科挙（官史の登用試験）に及第できず立身出世には縁がなかったが、自然を題材にした詩が評価された。

何 日 是 帰 年	今 春 看 又 過	山 青 花 欲 然	江 碧 鳥 逾 白	花 落 知 多 少	夜 来 風 雨 声	处 处 聞 啼 鳥	春 眠 不 覺 晓
何 日 是 帰 年	今 春 看 又 過	山 青 花 欲 然	江 碧 鳥 逾 白	花 落 知 多 少	夜 来 風 雨 声	处 处 聞 啼 鳥	春 眠 不 覺 晓

★小筆でなぞって練習しましょう。その後お気に入りの用紙に書いてみましょう。

毛筆の歴史

毛筆はいつ頃から使われていたのでしょうか。

今から六千年前となる紀元前四千年の中国の新石器時代、彩陶に毛筆が使われたと推定されています。文字を書く用具としては、甲骨文字の下書きを毛筆で書いたといわれています。下書きしただけで刻していない文字が発見されていて、毛筆で書いたような曲線になっています。甲骨文字には筆を表す文字（ や  : 筆の原字は「聿」）もあることから、殷王朝では毛筆を使用していたと考えられています。しかし、肝心の筆が出土していないため、推測の域を出ません。

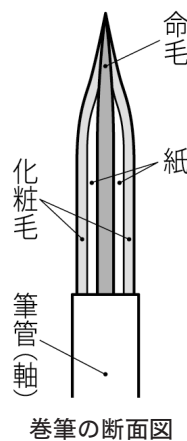
現存最古の筆は、紀元前四百年前後の戦国時代初期楚国の信陽筆で、竹簡などを作成する工具セットと共に出土しました。筆套（筆を収納しておくケース）も共に出土しています。筆管は竹で、長さ二三・四cm、直径〇・九cm、穂先の長さは二・五cmです。戦国時代から後漢の筆は十数件出土していますが、どれも小筆です。紀元前三百年頃の戦国時代中晩期楚国の墓から発見された長沙筆は、材料に兔の毛が使われていたことがわかっています。前漢時代の墓（紀元前一六七七年埋葬・鳳凰山一六八号墓）からは、筆と共に筆套、円石板

硯・硯石・墨・削刀が出土しています。削刀は青銅製の小刀で、帯に吊るして携帯できるように柄の部分に環があります。木簡や竹簡に書き間違えた文字を削り取るためのものです。紙と鉛筆と消しゴムのセットを、竹簡と筆と刀のセットに置きかえてイメージするとわかりやすいでしょう。当時の書記の役人（官吏）はすぐに文字が書けるよう削刀と筆を携帯したので「刀筆の吏」とよばれます。筆は簪のように髪に挿していました。

伝説では、初めて筆を作ったのは秦（紀元前二二一〜紀元前二〇二）の蒙恬將軍だといわれています。天下統一のため大軍を率いて戦っていた蒙恬將軍は、戦地から戦報を書いて王に送っていましたが、筆記具に不便さを感じていました。ある日狩りに出かけたとき、怪我をした動物が逃げる際その尻尾が血痕を残しているのを見て、様々な動物の毛を試し、墨を含みやすい筆を作ったと伝えられています。しかし、それ以前に筆が出土していることから、蒙恬は製筆法の改良者ということになります。

魏の章詒（草書の名手として知られる張芝の弟子）は書家であるとともに筆匠としても知られますが、その著『筆経』で卷芯法の製法を述べています。筆には巻筆と水筆があります。巻筆は図

のように穂の根元に紙を巻いて芯を作り、これに上毛を重ねます。穂先の動く部分が短く安定するため、細字でも強い線が書けます。仮名や写経を書くのにも適しています。



現在私たちが使っている水筆が主流となったのは、中国では北宋後期、日本では明治以降（江戸時代には中国から輸入した水筆使用が始まる）のことです。

筆が日本に渡ってきたのは五世紀で、正倉院に日本最古の天平筆とよばれる筆があります。奈良の大仏の開眼の儀式に用いられました。奈良時代には写経のために筆の需要が増え、全国十三か国で筆作りが行われました。平安時代にはさらに生産が増え、全国二十八か国で作られるようになりました。空海は最新の製筆法を中国から持ち帰り、筆匠に伝えて筆を作らせ天皇に献上しています。江戸時代には教育の普及による高い需要と上流階級の人達が使う高級筆の製作のため、極めて高い技術で筆が作られました。